千葉市立郷土博物館　令和８年度千葉氏公開市民講座

「肥前千葉氏と下総千葉氏－新天地（フロンティア）を求めた武士たちの系譜―」講演録

日時：令和８年６月１３日（土）１３：３０～１６：００

会場：蘇我コミュニティセンターハーモニープラザ分室　３階ハーモニーホール

講師：専修大学文学部教授 湯浅治久さん

司会　皆様こんにちは。ただいまより、令和８年度千葉氏公開市民講座「肥前千葉氏と下総千葉氏―新天地（フロンティア）を求めた武士たちの系譜―」を開講いたします。初めに、当館館長の児玉よりご挨拶を申し上げます。

児玉　皆様こんにちは。郷土博物館、館長の児玉です。よろしくお願いいたします。本日は千葉氏公開市民講座にご参加いただき、誠にありがとうございます。郷土博物館は昨年、令和７年１１月８日に展示の改修作業が完了し、リニューアルオープンしました。これまで実現していなかった千葉市の原始古代から近現代に至る通史展示が実現したほか、QR コードを読み取り様々な学びや楽しみにつながる「千葉介ナビ」という仕組みを設け、土器のハンズオン展示や在来馬の模型、火縄銃を構えての写真スポットなど、体験できるコーナーも整えました。老若男女を問わず楽しめる内容がそろっておりますので、ぜひ足をお運びください。

さて、本年は、千葉氏が千葉に本拠を定めた大治元年（１１２６年）から 900 年目となる記念すべき節目の年であり、市を挙げて千葉開府 900 年記念の様々な事業を展開している最中でござ

います。当館は千葉開府の日の６月１日にちなみ、この時期に毎年講座を開催してまいりました。千葉市は４つの地域資源を定めており、そのうちの１つに千葉氏があり、その理解を深めていただくことが本講座の目的です。毎回さまざまな側面から千葉氏について取り上げ、ご参加の方々から大変好評をいただいております。

千葉氏は房総でのみ発展したわけではございません。北は東北から南は九州まで、日本列島の各地に広がり活躍いたしました。その代表が、肥前国小城を中心に大きな勢力を築いた肥前千葉氏でございます。本日の講座では、専修大学文学部教授・湯浅治久氏にご登壇いただき、九州に新天地を求めた千葉氏の系譜をひもとき、その移住や支配の様相を、宗教や文化も含めて明らかにしていただきます。お配りした質問表を通じて、皆様のご質問にお答えする時間も設けてございます。この講座が有意義な学びのひとときとなることを願い、開会の挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

司会　続きまして、本日の講座の趣旨につきまして、総括主任研究員の外山よりご説明いたします。

外山　こんにちは。よろしくお願いいたします。これから先生のお話を聞いていただければ趣旨説明は不要かと思いますが、おせっかいながらご説明させていただきます。

これまで東国武士といえば、「草深い坂東に土着し、荒地を開発していった、質実剛健な在地領主層」とイメージされてきました。そして千葉氏はその代表的な存在として語られてきました。しかし、本当にそうだったのでしょうか。近年の急速な研究の進展によって、このような千葉氏像は見直しが迫られています。千葉氏は、北は東北地方から南は九州地方まで、日本列島全

体に広がった一族をつなぐネットワークを持ち、交流を保った武士集団であることが明らかになってきました。千葉氏は地方区ではなく、実は全国区だったのです。

九州に千葉氏がいたと言うと意外に思われる方もいらっしゃるでしょう。各地に移り、それぞれの地で発展した千葉一族の中で、とりわけ注目されるのが、九州の肥前国、現在の佐賀県小城市を中心に活躍した肥前千葉氏です。モンゴル襲来をきっかけに九州に移った肥前千葉氏は、新天地、先生のお言葉を借りればフロンティアで発展するとともに、南北朝の内乱の中で千葉にリターンしたりして、本国の下総千葉氏と関わりを持ち続けていました。

本日は、千葉から遠く九州の地に移り、朝鮮とも交易していた肥前千葉氏が、どのようにフロンティアに定着し支配を進めていったのか、宗教、特に妙見信仰、日蓮宗との関わりも含めて解き明かしていただけるものと楽しみにしております。長年にわたり肥前千葉氏の研究を進めてこられた湯浅先生のお話を、全国から千葉氏ゆかりの自治体の皆様が千葉に集う、もちろん小城からもお越しいただきますが、この「千葉開府 900 年」に伺えることは、記念の年にふさわしいことと存じます。この講座を通して、千葉氏が地方区ではなく全国区であること、さらに東アジア社会の中の存在であったことに思いをはせていただければと思います。以上、本日の講座のねらいについて述べさせていただきました。ありがとうございます。

司会　それでは講演に移ります。本日の講師、湯浅治久さんを紹介いたします。先生は千葉県船橋市のご出身で、明治大学大学院博士前期課程を修了され、長く市川市の市立市川歴史博物館に学芸員として勤務されました。２０１３年から専修大学文学部史学科の教授として、研究と教育に意欲的に取り組んでいらっしゃいます。現在も『新編　市川市史』の執筆を担当されています。

ご専門は日本中世史ですが、中山法華経寺のある市川市の博物館にお勤めだったこともあり、

日蓮宗の歴史にも詳しく、『戦国仏教　中世社会と日蓮宗』（吉川弘文館、2020 年）といったご著書もございます。また千葉県史編さんにも携わられ、「香取文書」や千葉氏についても研究を深められています。千葉氏については、市川周辺を所領としていた系統が、蒙古襲来をきっかけに九州の肥前、現在の佐賀県小城市に移り肥前千葉氏となったことから、その研究に取り組まれています。

本日のご講演との関係では、国立歴史民俗博物館の企画展「中世武士団　地域に生きた武家の領主」のプロジェクトチームで中心的な役割を果たされ、西遷御家人の代表的な存在として肥前千葉氏を大きく取り上げてくださっています。その図録は残念ながら売り切れとなっておりますが、県立図書館などでご覧いただけるかと存じます。ご著書も多くございますが、手に取っていただきやすいものとして、『蒙古合戦と鎌倉幕府の滅亡』（吉川弘文館、2012 年）、同じく『中世の富と権力』（吉川弘文館、2020 年）などがあります。先月には「塙書房」より最新のご高著『中世日本の地域社会構造　中間団体・社会的権力・交通』が刊行されたばかりです。ぜひご覧いただきたく、ご紹介します。

それでは、湯浅先生、どうぞよろしくお願いいたします。

はじめに

湯浅　皆様こんにちは。本日講師を務めさせていただく専修大学の湯浅でございます。ただいま過分なるご紹介をちょうだいし、恐縮しております。私は船橋に生まれ、この千葉にいろいろなご縁があって仕事を続けてまいりました。千葉開府 900 年という記念すべき年に、長年研究してまいりました肥前千葉、あるいは下総の千葉についてお話しできるのは、大変光栄に思っております。よろしくお願いいたします。

お手元には 2 つの資料があるかと思います。話の内容を書いたペーパーと、「資料 1」から見

開きでご覧いただける資料です。あわせてスライドでも、資料にない写真等を紹介しながらお話しします。

千葉開府900年でさまざまなイベントが催され、皆さんも楽しんでいらっしゃると思います。我々歴史を学ぶ人間としては、ここに持ってまいりました、主催者である千葉市郷土博物館が英知を結集してつくられた『千葉氏史料集』という大変すばらしい本に注目したいと思います。歴史上に残された千葉氏に関わるさまざまな史料を、厳密に現代の活字に起こして校訂するという大変な作業の成果です。私もスタッフの皆様をよく存じ上げておりますが、かつて千葉県史の編さんなどで積み重ねられた成果が、また千葉氏を中心にこうした史料集にまとめられたことは大変すばらしいと思います。こうした史料を１つ１つ紐解くことで、歴史を深く研究し、体感することができます。私の大学でも、史料を１つ１つ大事に読み解き、これからの社会を考えていこうと、学生・院生諸君と常々話し合っております。

そうしたことの一端として、今日は千葉氏、特に肥前千葉氏を中心にお話しします。お手元の資料の「はじめに」に、肥前千葉氏とはそもそもどういうものかを簡単に記しておきました。下総の千葉氏については皆さんよくご存じだと思いますが、その一族が鎌倉時代に肥前の小城、現在の佐賀県小城市に拠点を１つ作るわけです。鎌倉時代のかなり長い期間にいろいろなことがあり、やがて南北朝時代、鎌倉幕府が滅亡してから戦乱の時代に入ります。すると劇的な紆余曲折があり、小城にまた下総の一族の１つの流れ、系譜という言葉を今日の副題につけましたが、その１つの系譜がここに移住しようという決意を示し、結果的に新しい千葉氏の都を作る。下総で築き上げた東国の文化が、肥前・九州へ移っていく。これは大変ダイナミックなことを含んでおり、そのことをお話しできればと思います。

千葉氏は小城に拠点を築いた後、大きな城郭を構えて、下総に勝るとも劣らない権力・社会を築いていきます。やがて戦国時代になると、龍造寺氏という戦国大名とつば競り合いをし、結果

的に龍造寺の家臣の１つになっていく。その後また戦いがあって、鍋島という武士が統合していきます。鍋島は鍋島藩（佐賀藩）として九州で大きな勢力を築きますが、肥前千葉氏も鍋島の家臣となり、小城には小城鍋島藩という藩ができて、そこの有力な士族として長く伝わっていくことになります。

今日はその話をするつもりですが、もう１つ、先ほどの外山先生のお話にもあった「中世の武士とは一体何なのか」に注目したいと思います。中世の武士は農場を開拓して土に親しみ、土俗的な世界を生き抜く、「一所懸命」という言葉のとおりの存在で、とくに下総のような東国の武士は質実剛健と語られるのが常でした。しかし外山先生がおっしゃるように、最近はそのイメージが大分変わってきました。おそらく武士のルーツはもともと京都にあるのではないか、「京武者」ということが言われ、武士団とは、京都を中心にした武士たちと地域の武士とがシンクロして出てきたものではないか、と言われています。そうすると彼らはよく移動する存在で、「一所懸命」のように一か所に立ちどまる存在ではなかったことが明らかになってきました。これは平安時代からそうであり、最近の武士論の大きなポイントです。

しかし今日の私の話は、そうした東国の武士がさらに変わってくるのではないか、という点です。肥前を選び、そこで大きな勢力として土着していく、その一流が体現するのは、また違う武士の局面ではないか。そのあたりがどういう経緯でそうなるのかを意識しながらお話しします。

１　鎌倉時代の千葉氏一族

まず資料の１に入ります。鎌倉時代の千葉氏一族です。「資料 1」の上の方に、北海道は省いてありますが日本列島の地図があります。これは、鎌倉時代の千葉氏が下総以外に持っていた所領のリストを地図に起こしたものとご理解ください。先ほど紹介のあった、売り切れの歴博図録に載せたものですが、いま考えると抜けているものもありますし、別の千葉一族が持っていた所領も入っていて、少し再検討の余地があります。これは私が作ったのではなく作ってもらったも

ので、もう少し検討すればよかったとも思いますが、九州から東北までさまざまなところに所領を持っていたという全体のイメージはおわかりいただけると思います。

所領だけでなく、あわせて守護職を、たとえば大隅（鹿児島県）や伊賀（三重県）に持っています。これは大変大きな武士団の特徴で、私の知るところで千葉に匹敵するのは三浦ですね。同じ平氏で、神奈川あたりの三浦氏が同じようなものだったと思います。そして三浦も千葉もかなわないと思うのは、ご存じのとおり執権北条氏、特に得宗という北条の嫡流が持っている所領で、これは比になりません。列島各地に、鎌倉時代を通じていろいろな所領を持っています。それに比べると見劣りはしますが、千葉氏や三浦氏が並んでこれだけの所領を持つに至った。資料には源平争乱や承久の乱を書いておきましたが、こうした戦争で勝ち抜いて恩賞を得て広げてきたのは事実かと思います。

資料１の下に「系図 1」を、資料２に「系図 2」として２つの系図、それから「千葉介及び関係者の生没年」という表を出してございます。系図にはいろいろな人名が入っており、私も人の名前を覚えるのは苦手でいつも往生していますが、さすがに千葉家は大体頭に入りました。系図 1 は、後でも触れますが私が作ったもので、「神代（くまじろ）本」あるいは「徳島氏系図」という、九州に伝わったものをもとにしています。系図１・2 に分かれ、常長というところが１番上にあり、４代あとの常胤の名が右の方にあります。お探しいただけますか。常胤の父が常重、開府 900 年に関わる方です。常胤は今日の話の１つのメインで、大きな役割を果たした治承・寿永の内乱期の人です。

系図２は常胤を頭に出して、次に胤将（正）、成胤、それから胤綱、時胤とまっすぐ下りてくるのが、「千葉介」と言われる本宗家と考えてよいかと思います。頼胤というところに千葉介と書いてあり、その横に多くの人がまた出てきて、ややこしい限りですが、１番左に下総千葉氏、その横に肥前千葉氏と書きました。系譜ということで言えば、こうして連綿とつながる千葉氏一

族の中で、私はこの胤泰という人、あまり歴史上有名ではありませんが、この方が移住に大きな役割を果たしたと思うので、そこから肥前千葉氏と書きました。ただ、肥前国の実態がよくわかるという点では、千葉介と書いたところの頼胤という人がいます。「頼む」に「胤」と書きます。鎌倉時代中期の方で、実態がよくわかる史料が残されています。

資料２の「系図２」をご覧ください。これは先ほどの千葉県史の中で別の先生が作られたもので、ＡとＢがあります。私としては、千葉県史も論じているように、このＡの信憑性が高いと考えます。先ほどの「神代本」、後でお話ししますが、そうした系図をもとに、『本土寺過去帳』や「般若院系図」を加味しながら、常胤以来の歴代、その没年と年齢を示しています。これはなかなか難しいところですが、こうした連綿としたことがわかる武士団はあまりないので、千葉氏は恵まれていると思います。そこに注目をしていきたい。

常胤は１２００年に８３歳という高齢で亡くなっており、当時としても間違いなく長寿だと思います。そのあと、胤正（政）が６７、成胤が６２と来るのですが、実は鎌倉中後期、中期の少し前ぐらいから、胤綱、時胤、頼胤の没年を見ると、下の表に主な出来事と合わせて書いてありますが、どうも短命なのです。胤綱が３１、時胤が２４、頼胤は人為的な死で３７歳という若さで没します。鎌倉時代の千葉氏についても研究は進んでいますが、千葉県史などを見ると、いろいろな政争や幕府の政情などがあって、どうも千葉氏は少しマイナーになりかけたところがあったのかもしれません。

実はそれに対して「上総千葉氏」というものがあり、常秀というところから、系図にも出ていますが、上総を中心としたこれも千葉氏なのですが、この方々が非常に大きな力を持っていたことがわかっています。そうした千葉氏一族の紆余曲折の中で、やはり常胤以来の系譜が重要視されていき、肥前国においてもこれは重要であったと思います。肥前に所領を持った契機も、おそらく源平争乱期における常胤が最初ではないか、正確な史料はなかったかと思いますが、そう考

えることができます。このあたりは、『千葉氏史料集』の中の「千葉氏へのいざない」という、史料を大変丁寧に解読した箇所、執筆者の岩橋さんが今日も会場におられますが、その９に「鎌倉時代における肥前千葉家の活動」という文章が載っており、大変まとまっていますので、ぜひお求めいただき勉強していただければと思います。

１－（２）　千葉氏による肥前小城郡の経営

話は(2)に入ります。千葉氏による肥前小城郡の経営をお話しします。先ほどの千葉頼胤、１３世紀半ばごろの千葉の惣領家ですが、この鎌倉時代には、下総の千葉と肥前の小城、その両方に、もちろん他にも多く拠点を持っていました。その両者の交流が、実は非常によくわかる史料に恵まれているのがこの時代です。それを紐解くと、頼胤時代の千葉氏の具体的な活動がよくわかってきます。

資料は図２と３で、いま見開きでご覧の資料３に書いてあります。その下の地図をスライドに出しました。肥前千葉がいた場所は、佐賀市の西どなりですね。多久という市があったり、神埼というところがあったりと、それらに挟まれた地名です。もともとは小城郡という、肥前国の１つの郡だったと言えます。

この肥前国の状況を理解するには、実は下総国に大変重要な史料があります。中山法華経寺というお寺が市川市にございます。先ほどご紹介いただいたように、私は市川の博物館学芸員を長く務め、よく出入りもさせていただきました。中山法華経寺には聖教殿（しょうぎょうでん）という、お寺の宝物を収載する宝の蔵のようなものがあり、たとえば『立正安国論』など、日蓮が書かれた国宝が納められていることでも有名です。その中に、日蓮自身が書いた真筆の聖教があります。聖教とは仏典のことですが、重要文化財になっています。

実はこの中山法華経寺について、レジュメの１（２）「日蓮遺文紙背文書の世界から」というところをご覧ください。この日蓮の真蹟の聖教の裏に、実は肥前関係の、この写真に映した史料

があるのです。これはどういうことかと申しますと、当時の千葉氏は千葉を拠点としていたのはもちろんですが、国府の置かれていた市川にも屋敷を持っていました。中世の武士は、こうした古代以来の拠点に置かれた出張所のようなところを押さえ、国を統括することが多かったのです。そこに事務官僚のような人々、冨木常忍（ときじょうにん）、大田乗明（おおたじょうみょう）のような人々が近くにいて、千葉氏の政務を国府の関連施設でとっていたのだろうと思います。

冨木常忍という人は特に重要なのですが、官僚ですから事務処理をするわけですが、その事務処理をした紙の裏を使ってくださいと日蓮に渡すのです。そうしますと、冨木常忍が千葉氏の関連で作っていた当時の古文書が、その紙背に残されてきた。それが「日蓮遺文紙背文書」なのです。古文書というのは大体、残すべくして残すもの、金銭証文など大事なものは残していきます。一方、たとえばスーパーのチラシや講演のポスターのようなものは、用が済めば不要になり、裏紙にするか捨ててしまいます。当時の人も同じで、廃棄されるものでした。だから、残すべくして残されたものと、偶然残ったものとがある。どちらも大事ですが、どちらかというと、消そうとしていたものの中に何が書かれているかが非常に面白い。そういうものが、この日蓮の紙背文書に残されているのです。

そして、その下総国の千葉氏の行政文書の紙背に、肥前関係のものがたくさん収められていたことがわかってきました。これは大変面白いことだと思います。歴史研究上も貴重で、資料４に、活字に起こした史料１と２を出しておきました。活字化はいろいろな事情で難しかったり全部は残っていなかったりして大変なのですが、千葉県史以来、いろいろな先生方が心血を注いで活字に起こしてこられました。今回の『千葉氏史料集』にも当然収録されているかと思います。その中に、肥前国の状態と、下総国、そして京都を結ぶさまざまなことが書かれています。

史料１は、西心（さいしん）という人の書状、手紙です。細かいことは省きますが、下総の千

葉のトップ、千葉介がしばしば京都に上る、京都大番役です。そのときには莫大な費用がかかります。何百万円という規模でしょうか。それを、お金を貸す「借上（かしあげ）」という専属の金融業者に近い人たちから借りている。千葉氏の財政は火の車であるということが、鎌倉時代を通じていろいろわかってまいります。そのときに抵当にされるのが、肥前の年貢とか財なのです。この財を当てにして借金をする。お金を貸した人は、それを回収するために、今度は肥前小城に自分で下向したりする。そういうことがわかってまいります。

ここに出ている「すけの馬允（うまのじょう）」という人はとても面白い、借上という金融業者ですが、この人が小城の方に行って回収しようとしたりする。「大宮の御地」とありますが、これは千葉氏が京都に持っている所領であろうと。それもカタに「しちにをきて」、質に入れて工面する。そういったことがリアルに書かれていたりするのです。つまり、当時の武士は１か所で１つの財政を経営しているのではなく、列島規模で、いまで言えば信用経済、為替のようなことも含めて、さまざまな所領を全体に経営する、総合商社のような存在であったことが、この史料からわかってまいりました。これは他の武士ではなかなかわからないことで、遠くの所領をどう維持していたのか、どんな人が行ってどう経営していたのかは、あまりわからないのです。その点で大変貴重な史料だと思います。

スクリーンには、別の史料を出しています。これは後でお話しする岩蔵寺という、肥前国小城のお寺があるのですが、その院主、トップが千葉氏にある訴えをしているものです。前半しか出せませんでしたが、自分の岩蔵寺のトラブルについて千葉氏に裁いてほしい、と書いてあります。これがどこでされているかが面白いのですが、千葉氏は先ほどお話ししたように京都に大番役で上るときがあります。その時を目がけて、この岩蔵寺の院主が京都に上り、その訴訟を嘆願していることがわかるわけです。武士の動向としても大変興味深く、また地域の有力なお寺の紛争を解決することで千葉氏が存在感を示していることもわかる、という史料です。

それから資料４に出した、史料②と書いたものです。これは「某書状」という誰が書いたかわからないものですが、傍線を引いたように、「小城の小二郎・東郷の五郎・赤自の執印・大宮司入道」といった人々が、ある税を課されて迷惑だ、ということを訴えている史料です。これも千葉氏に嘆願を出しているとわかります。こうした現地の武士、現地にもきちんと武士はいるわけです。当時の九州の制度ですと、これは小地頭と言われる人々で、千葉氏のような外来のやや威圧的な存在は惣地頭というように分けられているのですが、こうした小地頭たちの訴えも聞いていく。そういったことが史料②からもわかります。スクリーンに出しているのは西心書状のもう一つのもので、見てみるとややこしく、どこに字が書いているかわからないようなものです。この文書の裏にあるのは日蓮真筆の経典ですのでその裏が滲んでいて、誰が書いて出したのかわからない。これを読み解くというのは大変なことだと思うのですが、そういった努力によって千葉だけではなく肥前のことがわかってきた。現地の人々が訴えた文書の片端と言えるかと思います。

こうした史料によって、下総・肥前の千葉氏の交流や具体的な経営のあり方がわかる。なかなか面白いことだと思います。

小城の地理と文化

前後しますが、「小城の文化と宗教」を解説していきます。小城の景観の写真を２つ用意しました。右の方は桜が咲き誇っていますが、これは今、桜岡公園といって、小城藩の政庁があったあたりだと思います。とても風光明媚なところで、北側にうっすら見える山が天山という山です。もっと北に行くと背振山という、九州の背骨と言われるような山脈があり、その背振山の山脈が連なって南に来ると天山が出てきます。宗教的にも重要で、先ほどの岩蔵寺があるところなどもうっすら見えます。左の方は、後でお話しする千葉城、南北朝期以降の千葉氏が拠点としたところの上から見た、小城の町だと思います。１直線に道路があり、この辺りに市街地が集中していますが、雰囲気が良く景観保存地になっているのか、高いビルがないのです。九州にはそう

したところが多いのですが、ここも違う理由からも、九州の小京都などと言われているところだったと思います。

資料３にお戻りください。下の方に、これは田中大喜さんという研究者の研究をもとにしたものですが、左上の方から祇園川という川が流れています。この祇園という地名も、実は都市的な神社、祇園社というものがあります。そうした都市的な神社があるのも、都市の１つの条件です。この祇園川が中心に流れていて、その左上の方に岩蔵寺とあります。これは寺社の重要なところで、天台宗ですが、天山神社という天山山脈の１つもあります。ちなみに地酒の「天山」というものもありますが、この祇園川の水がいいそうです。

これがだんだん下流に下っていくと小城に入っていきます。その途中、真ん中あたりに矢印が左から右に書いてありますが、ここに円通寺というお寺があります。この寺は肥前小城の千葉氏の古文書などが伝来している、非常に関係の深い禅宗の寺院です。田中さんによれば、ここが千葉氏の、本来の鎌倉時代に入った当初の屋敷であろうとされ、２０２４年に論文に書かれました。私は一緒に肥前の調査をしました。私より少し若い研究者なのですが、素直にうなずけないところが残っていてまだ何とも言えません。しかし、この円通寺、そしてこの千葉城というのは、南北朝期以降ここが拠点となる、さきほどの写真に出てきたところ、このあたりが小城の中心地であることは間違いありません。

左の方に光勝寺というお寺があります。これは後でお話しするように、日蓮宗中山法華経寺の教線がこの地に及んでいく、およそ鎌倉時代後期だと思いますが、その後、西の法華経寺と呼ばれるような大きな日蓮宗の拠点になっていきます。また、もう少し北の方に目を移すと「妙見遺跡」と書いてあり、このあたり、妙見社、北浦というところがあります。妙見神社、千葉妙見がありますよね。法華経寺にも妙見社があります。妙見信仰がこのように肥前に扶植されていることがわかるわけです。

小城の中心地は、祇園川が形成する扇状地と言ってよいと思います。天山山脈が扇状地になり、だんだん低くなっていくと、有明海に行き着きます。ムツゴロウがたくさんいる。私も調査のときに見に行きましたが、有明海にだんだん近くなる。逆に言えば、有明海との関連で交易の拠点として、実際に幾つも遺跡が出ていたりするのですが、少し低いのですね。水害などがありますと土地が柔らかくなります。私が行ったときも台風があって大変でしたが、そうした低い、広域の拠点ながら少し開発しづらい部分も、南の方へ行くとあるのです。

ところが、この小城というのは、天山山脈との関連で少し土地が高く、しかも水が豊富に湧き、あるいは祇園川の水を用水としてうまく使えるという、開発しやすいところなのです。そういうところに、千葉氏は入っていった。しかし、そういうところには在来の人々もいます。先ほどの小城氏は宇佐宮の関係の人だと言われています。宇佐という宗教、豊後宇佐社の勢力も入っているそうですが、そういった人たちも地元で頑張っている。だから、鎌倉時代にはうまくやるところはうまくやるけれども、お互いになかなか折り合えないところもあったのかもしれない、そういう状態ではあったのだろうと思います。

その中で千葉氏が１つ力を入れたのは、やはり宗教勢力との折り合いだと思います。資料５史料③に円通寺のものを挙げておきました。この円通寺に、弘安６年という時代に、おそらく千葉宗胤と思われる人物が、土地を寄進した際の寄進状が残されています。これは中世によくある、神仏に土地を寄進するものですが、傍線部に「常胤以来代々幽霊菩提を弔い奉る」というように、まさに千葉常胤が意識されています。宗胤の時代に、寺へ寄進をしていることがわかるわけで、こういった宗教への関与ですね。

それからもう１つ、この円通寺には、永仁２年（１２９４年）の木造多門天立像・持国天立像という仏像があります。史料④に像容のわかる写真と、このお腹の中に書かれた墨書銘があり、仏像を作った経緯が書かれています。慶派（けいは）、運慶・快慶が有名ですね。その慶派の系

譜を引く仏師たちが作った、大変、京ぶりの仏像があるわけです。その中に平氏、「平朝臣（あそん）」と書いてありますが、千葉の人々が帰依をして、上の銘文には国家安穏を願う文言が書かれています。こうした仏像、そしてそこに込めた願いが、１３世紀には見られるようです。

それから、先ほどお話しした光勝寺、東国から持ってきた日蓮宗の宗教がもとになっている。それを表すような法華曼荼羅ですね。日蓮が顕した法華曼荼羅は中世各地で本尊になりますが、これは日祐という法華経寺３世が作った、延文年間という南北朝時代の面白い本尊です。なぜか武蔵国の石浜法華道場（東京都台東区）にあてられているものが肥前にあり、何故でしょう、ひょっとしたら交流があって持っていったのかもしれません。しかし大変良いものだということは間違いなく、こういったものが本尊として使われていたことがわかります。

このように、鎌倉時代の肥前において千葉氏が残した痕跡、すべては紹介できませんが、下総との交流や所領の経営、それから現地の非常に都市的な、さまざまな寺社があって地域の秩序を体現していたところに、千葉氏がみずからの権益を落とし込んでいく。また自分が下総国で培った日蓮宗というものもそこに持っていく、というようなことも見ることができるわけであります。いわば土着の文化と、京都や下総という外来の文化が、この小城において融合していく。もちろん現地勢力との対立もあったかもしれませんが、そういうことが見えるのが鎌倉時代の様相だと言うことができると思います。

２　千葉氏の分裂―肥前「土着」の兆し―

それでは、こうした鎌倉時代の状況を前提に、少し時代を進めます。レジュメの２「千葉氏の分裂―肥前「土着」の兆し―」のあたりをお話ししてまいります。

スクリーンに挙げているのは、大変有名な『蒙古襲来絵詞』です。蒙古が２度来ておりますが、その際の竹崎季長（たけさきすえなが）という武士の活躍を描いた、国宝の絵巻です。これに象徴されるように、実はモンゴル合戦、蒙古の合戦が２回あり、千葉氏が肥前へ土着する１つ

の契機になります。それまでの状況は、土着というよりは、もっと全体を見通した中での交流というイメージだと思います。これは、今までの研究でも明らかになっている１つの武士のあり方としてはサンプルとして貴重ですが、やがて地域に生きる、根ざす武士へと変わっていく契機がある。さまざまありますが、その１つにこの元寇があるということをお話ししたいと思います。

このときに、先ほどからお話に出てきた千葉頼胤が、蒙古が来たということで下向を強いられ、建治元年（１２７５年）、この小城で死んでしまう。早世と言ってよいと思います。そのあと、子の宗胤という人が、跡を継いで肥前に下向することになります。千葉宗胤は、弘安６年以降、先ほど地図で示した大隅、薩摩の隣ですが、その守護も兼ねて下向していたのだろうと思います。先ほどの円通寺の寄進状もその時代に入りますが、この人もあまり活躍することなく、１２９４年に小城で死ぬことになるようです。

その次の代の胤貞です。系図１をご覧いただきたいと思います。胤貞が小城に下向するのは、史料によると、正和５年（１３１６年）になります。２０年ほどスパンがあって、その間、小城における千葉氏の拠点は少しマイナーになっていたのかな、つまり、惣地頭としての千葉氏がいなくなってしまったと考えがちなのですが、実は後の史料からわかるように、宗胤の妻、胤貞の母でもありますが、この明恵（みょうえ）という人物が頑張って小城の掌握をしていたと推測できます。このあたり、中世の地頭級の領主における女性の役割として注目できるところではないかと思います。

こうしたモンゴル襲来を契機に、世代が変わってまいります。レジュメ２(2)には、鎌倉末期、千葉胤貞（千葉太郎）と千葉貞胤（千葉介）と書いておきました。系図で言うと、宗胤と胤宗という人のそれぞれの子であって、いとこに当たります。小城に関わっているのがこの胤貞系なのですが、そうではない、胤宗―貞胤系というのがあります。実は小城の方に行くこの胤貞系が、胤貞も含めて戦乱で死んだりいろいろな顛末があったりして、だんだんトップの座から降り

てしまい、その後、下総で覇を唱えていくのは、この胤宗―貞胤系である、ということなのです。

整理しますと、蒙古襲来で頼胤以来、だんだん事件と死が重なっていく中で、下総の国にいた主流が、胤宗―貞胤系に移ってしまった、ということです。中世武士の一族の中では珍しいことではありませんが、そうした動きが鎌倉末期から見えてきます。鎌倉末期に小城と京都、あるいは下総を行ったり来たりする胤貞の系統と、千葉を拠点にしたこの貞胤系の拠点が、どうなっているのか。これも１つの研究課題ですが、やはりトップは、千葉介を名乗る貞胤系で、胤貞系は「千葉太郎」ということで、勢力は持っているのですが、本宗の座からは少し降りてしまったか、ということになります。

スクリーンには千葉の地図を出しておきました。千葉庄と八幡庄、千田庄。この３つの地域がそれぞれ微妙に所領を維持しながら、協調と対立の関係にあったということになるようです。

この後、南北朝内乱に入って、この貞胤と胤貞系が動乱に巻き込まれて争い、その中でまた肥前国への新たなフロンティアが生まれてくる、という話になります。ここで一旦休憩を挟みます。前半をご清聴いただきありがとうございました。

司会　お時間となりましたので、講演を再開いたします。湯浅先生どうぞよろしくお願いいたします。

湯浅　はい、再開させていただきます。お休みの途中にも多くのご質問をいただき、少々目を白黒させておりますが、もう少しおつき合いいただければと思います。

２－（３）　南北朝内乱と千葉氏

レジュメ２の(3)です。先ほどは千葉胤貞と貞胤の鎌倉末期のお話をしましたが、南北朝の内

乱とともに、すなわち南朝と北朝の対立とも重なりながら、さまざまな対立がかぶさってまいります。先ほど資料でお示ししたように、千田庄、千葉庄、八幡庄、市川、多古、千葉といった各地を拠点として抗争していたわけです。

建武３年に千葉胤貞が亡くなったことが知られており、これを契機として、貞胤方（千葉介方）が下総国で勢力を安定化させていったのだろうと思います。系図１をご参照ください。

系図１の冒頭に常胤があり、そこから下へと続いていきます。頼胤がいて、その下に胤宗と宗胤が記されています。いま話題にしている貞胤と胤貞はいとこ同士で、胤貞のところからさらに進むと子どもたちの名前が記されています。

このあたりが以降の話の要点になります。胤貞が亡くなると、その継承をめぐって、また１つ争いが起こります。いったん胤平という息子に継承されますが、やがてさまざまな紛争が生じます。詳細には触れませんが、その紛争を経て、肥前千葉氏事実上の祖となる胤泰と、下総の千葉氏のその後の中心になります胤継とに分かれていきます。

中心となる胤泰と胤継が分かれ、下総は下総、肥前は肥前というように分立していきます。この分かれ方こそ、多くの争いの結果として肥前千葉氏がたどっていく系譜ということになるわけです。つまり、鎌倉末期モンゴル戦争を契機とし南北朝の内乱を経て、武士たちのさまざまな軋轢や矛盾、抗争を経たうえで、胤泰という人物がこの肥前千葉氏を選んだ、という事実になるのではないかと思います。

一方、胤継ら下総国に残った系統は、貞胤の子孫たち、そしてその後東国に残っていく千葉の一族（千葉介）、しだいにそこへ包摂されていくようです。やや込み入っていますが、これからお話ししたいのは、その胤泰がフロンティアとして肥前国へ入っていく様相です。

３　土着の経緯

レジュメ３です。「土着の経緯　建武４年（１３３７年）小城郡の国人や河上社の所領を安堵」と記したあたりから続けます。

胤泰は南北朝後期の武将で、建武年間（１３３７年）から暦応３年（１３４０年代）にかけて、さかんに小城郡の現地の国人や寺社に対し、もちろんそれ以前からさまざまに働きかけてはいたのですが、さらに範囲を広げ、争いの調停や土地の寄進など、より積極的に繰り返していきます。これについては多くの史料があり、先ほどの『千葉氏史料集』にも収録されていますので、後ほどご覧ください。

私がこの中で最も大きな契機と考えるべきだと思うのは、肥前国の一宮である河上神社（佐賀市）とのかかわりです。この河上神社の大宮司は、神社の役職として重要なものですが、そこに胤泰が就任します。以降、肥前千葉氏は享禄３年（１４５０年）までこの大宮司職を手放しません。これは、肥前国の一宮という非常に大きな宗教的な権威の中へ入り込んでいくということです。

おそらくその意図は、それまでいろいろと交流していたような東西の武士の動きではなく、その地域で本腰を入れて生きていくという、１つの宣言だったのではないかと思います。というのは、胤泰の系統は、胤貞もそうですが、さかのぼって見ていくと、守護の系譜であったり、国衙（こくが）をきっちりとおさえていたりと、中世の巨大な武士の系譜なのです。それが結果的に、下総国に残る人々に、言葉は少し悪いのですが取られてしまうということになります。

そうすると、彼らが持つ行政機能や公への関与の力はやはり強い。そこで選択されたのが河上社の大宮司職への就任ではなかったか。これは大きいと思います。千葉県でいえば下総の香取社ですね。香取社と千葉氏との関わりも大きいのですが、それと同じく一宮へ完全に入り込んでいく。河上社の場合はそれが大変大きいと思うわけです。これが１点目です。

岩蔵寺過去帳の分析

次はこの話のメインの１つです。「岩蔵寺過去帳」の話をしたいので、史料⑤をご覧ください。これは先ほど触れた岩蔵寺で、祇園川の上流に位置し天山山系に連なる天台宗の大寺院だと思いますが、この寺院が残した過去帳です。過去帳とは、ありていに言えば点鬼簿などとも言いますが、死者を書き連ねる名簿で、そのリストに載った人を供養するという、寺にとって非常に重要な帳簿だと思います。

鎌倉時代からの「岩蔵寺過去帳」が伝わっていたわけです。そこに「当郡代々地頭」というところがあります。ここに千葉氏の名前が連ねられているということをご理解いただきたいのです。これを活字に起こしたものがあります。

「当郡代々地頭」と大きく記され、やはり常胤から始まっています。これは常胤の影響力の大きさを示すものでしょう。下の方に胤政、成胤、胤綱、時胤、泰胤、頼胤とあります。泰胤という人については少しいわくがあるのですがここではお話ししません。頼胤は、先ほど触れた蒙古襲来で早世した人です。

次の行に宗胤とありこれは鎌倉時代で、次に明恵と記されています。これは宗胤の妻であって、次に出てくる胤貞の母です。「当郡代々地頭」というリストに母親が記されているのが１つのポイントだと思います。当時は女地頭はありふれたことではあってたくさん例はあるのです。ですからこれは正式に明恵が地頭になったと考えてもよいですし、地頭というステータスが小城における支配者、為政者の象徴であるとも考えられます。いずれにしても、宗胤が死去のあとは明恵―胤貞体制とでも言うべきものが存在していたことがわかります。

次に、この胤貞の下には高胤、胤平、直胤、胤直とあります。資料１の系図を見ますと、胤貞の息子の名前が並んでおり、そこに確認できるかと思います。少し異論もあるのですが、兄弟、子供としておきます。ところが直胤、胤直という人は、今のところ確認できず、よくわかりません。

しかし、次の３行目、ここが私の注目したいところです。四角がありその下に「謎」とあります。そこに割注がありまして、妙胤（みょういん）廿二（にじゅうに）歳、正平２０年正月３日、これは死没年ですね。その次に胤泰が記され、同じく死没年が応永１７年。次に「胤基法貞」とあります。「法貞」というのは法名になるのでしょうか、胤基という人は胤泰の子になります。肥前千葉氏の第２世代ですね。

そういたしますと胤貞以降、兄弟が記されている。ここで系譜が少し変わってきます。上の方ごんべんの書かれた人はよくわからなかったのですが、私はこの人物を、下総国にいて、そこを分担した胤継だと考えたいと思うのです。「継」はいとへんで、ここにはごんべんとありますが、許容範囲として胤継の上は「胤」だと。胤、胤と来ていますから、そのように考えていくわけです。

彼らが過去帳の中に書かれていることで、胤泰の死没が応永１７年（１４１０年）で、８０何歳と記されています。８０歳としても高齢です。当時としてはよく生きたという感じです。ところが胤継の方は正平２０年ということで、２２歳と記されています。大変な早世であり、千葉氏の早世癖が出てしまったのか、とも思いますが、兄弟とした２人の人生の違いですね。早すぎる胤継の死に比べ、肥前の胤泰は大変な長命であります。

このあたりのことをつらつらと考えますと、胤継は下総国で貞胤系の強面の人たちに少々疲れ、しだいに武士団が小さくなっていくなど、苦労が多かったのではないか。それに対し新天地で伸び伸びと生きて、しかも良い土地ですから順調に所領を継承していった胤泰との違いかな、などとも思うのですが、これは少々穿ちすぎかもしれません。

ここで胤泰の生年がわかるわけですね。ただ、問題はこの時期に、他の資料で胤貞がもう死去していることがわかっている点です。ですから一時期少し混乱しまして、このことは論文にも書きました。胤貞の死去については『梅松論』に記載があったと思うので信憑性が高いとは思うの

ですが、このように人の死没年というのはなかなか難しいところがあります。

養子と考えることも、当時の武士では十分可能かと思います。胤継の場合、実は中山法華経寺の史料が残っており、それによると観応年間（１３５０年ごろ）から出てくるのです。ですから胤平のあたりから混乱していて、後発で取り立てられた人と考えることも可能だと思い、「よし、この考えでいこう」と私は論文を書いたのですが、専門家の先生に怒られてしまうかもしれません。ですが思い切ってそう考えてみました。

このように考えると、交流と途絶がよくわかります。中山法華経寺の史料には、胤継と胤泰の関係、交流を示す史料が若干残されています。しかし一方で、胤継が早死にし、胤泰が長く生きていく中で、皆さんも同様なことはおありでしょうか、親戚づき合いはやはり遠くなり、同世代がそれぞれの道を歩むと、疎遠になることもありますよね。私は、それがこの列島規模で起こったのではないか、大変人間臭いところもあるのではないかと思っているのですが、いかがでしょうか。

そう考えまして、東西の武士団相互の実質的な親戚づき合い・交流も途絶したと、現在は考えております。ただ、観応年間から応永年間というのは、全国的な規模での中世武士団の大きな交流がどうもできなくなってくる。これは室町幕府や、守護の様々な施策などにも起因するので、兄弟の早世だけが原因というわけではないのですが、さまざまな要因と社会体制の変化の中で、武士は独立せざるをえなくなる。地域で何とか生き抜いていく。その延長に、戦国大名や国衆と呼ばれる人々の生きざまがあるかと思いますが、その決定的なところがこの１４世紀後半、第４四半期から１５世紀初頭にできてくるというのは通説でもありますし、私もそう考えています。これが胤泰スタートライン、スタートアップ胤泰ということでございます。

（２）千葉氏の一族の小城への入部

次に、一族とはいっても胤継や胤泰のような一族だけかというと、そうではない。ここがまた

１つのポイントで、資料３(2)「千葉氏の一族の小城への入部」というところになります。土着した一族・家臣の姿が、先ほどから示している岩蔵寺の過去帳から抽出できるのです。

この過去帳は３巻に分かれていて、１巻目の末尾に応永１３年という死没年の人が記されており、そうすると１５世紀初頭までが第１の巻ということになります。第２・第３の巻は当然その後になりますので、ちょうど境目、武士が移動するはざまのところに、うまく残ってくれた過去帳なのですね。これは死者の弔いが目的のものですが、歴史家としては史料として使えるわけです。ただ残念ながら、これは火災に巻き込まれ、１９８０年代に焼失してしまったそうで、原本を私も見ておりません。本当に残念ですが写真で拝見するしかありません。これを細かく見て、千葉から小城に行った人、このちょうど端境期に見える人のリストを作ってみました。それについては、資料７から８にわたって細かくカウントしてあります。２年ほど前に書いた論文で公表しておりますが、なかなか面白いのです。

子細に見ていき死没年を拝見すると、鎌倉後期から南北朝期に集中していくことがわかる。人名で千葉から行ったとおぼしき一族というのを抽出しました。それは、多古町周辺の千田庄に早く分出をした、そこに記された中村、岩部、原、円城寺、金原、三谷、飯笹、牛尾といった一族を見ることができると思います。

この人々について、系図１という資料の１枚目にお戻りください。これを見ると興味深いことがわかります。これは先ほど述べた「神代本」あるいは「徳島本」の系図をもとに作ったものですが、常胤より前に分かれた千葉の一族が詳細に書かれているのです。このことから、千葉の系図として比較的古いものだと評価されてきたかと思います。特に、岩蔵寺過去帳の移住者と、この神代本の系図を引き合わせてみますと、常胤以前に分出した原や金原、飯笹、岩部、牛尾という人々の系譜が書かれているのです。

これは何を示すかということです。実は、常胤以前に分かれた千田庄のこういった人々は、地

頭ではないのです。常胤が頼朝に付いて戦った時代に、千田（藤原）親正という国司の末裔がこの千田庄に盤踞（ばんきょ）していた。これは最近の研究で非常にわかってきていて、大変な勢力を持ち、これらの人々はおそらく藤原親正に付いて千葉氏に敵対した人々だと言われています。

そうするとどうなりますか。先ほどから、常胤以来の系譜を重視されていた人、その中から結果的に胤泰のような人物が出てくるのはわかりますが、それ以外にも千葉の苗字でありながら、どうも地頭になれないような一族の人たちが比較的多く千田庄で確認できるのです。もちろん関東にも痕跡が残っているのですが、それを考えると、まさにフロンティアとして、下総では出世が難しいということで、新天地があるならそちらで移住しようか、集団を作ろうかという考えがあってもおかしくない。そういった人々として位置づけられるのではないかと私は考えています。これは面白いことだと思います。

また、この千葉のあたりの関係では仁戸田氏という人がいます。「仁戸名」（千葉市中央区）という地名がありますね。あるいは市川のあたりでは栗原という武士、あるいは平田という武士。これらは下総ではまったく出てこないのですが、こうした人々がむしろこの小城で確認できる。千葉とともに移住した姿がわかるということなのです。

これは簡単なようでいて、実は他の武士でこういうことがわかる武士はいないのです。こうした、いわくつきの一族の移住が追えるのは、やはりこの千葉氏だけなのですね。今回の準備をする上で再認識したのですが、千葉氏の事例は非常に貴重であり、稀有と言ってよい。大変面白い事例だと認識しています。もう１つ言うならば、この同時代の人々、下総国にも同じく原氏や円城寺などがいるわけですが、その人々と交流があったのか。これについては何とも言えません。小城へ最近調査に行ったときにそこを気にして見てみたのですが、痕跡を追えませんでした。これは武士の交流という意味で大きな課題です。本宗だけではなく、一族や家臣たち、どういう交

流があったのか、あるいはなかったのか。大きな課題を残してしまっています。

それはともかく、いまお話ししてきた「神代本」ですが、小城で千葉氏が戦いで衰えてきたときに、神代氏という武士に、自分の系譜やいわば宝を託したことがわかっています。その家に伝わったものです。残念ながら古い時代から確認できないということ、また、それをもとにした「徳島本系図」というものもありますが、それも大変貴重で、現在拝見できないということで、史料的な課題があります。いずれにしろ、この系図からわかる事実、それから岩蔵寺過去帳からわかる事実というのは、古文書、古記録だけではなく、とても面白いものだと思うのです。

その特性を踏まえて、私は、岩蔵寺の過去帳というものは、千葉氏や一族・家臣がまさに小城郡に土着して、そこで生きるための、過去帳に載せてそこで生きていこうとした証、順応の証ではないかと考えました。一方、系図というものは、自分の出自を強烈に意識するためのものであります。そうした研究も実際にあります。「自分は千葉のこういう系譜から生まれてきたのだ」ということを示す、武士のアイデンティティの強烈なアイテムとして系図を位置づけるとするならば、資料的にこんなことが言えるのではないか、ということを、かつて論文で書きました。

以上が、移住・土着の顛末ということであります。この後、千葉氏はさまざまに分裂を繰り返したりもするのですが、そこはまた小城の地域史ということで、別に検討せねばなりませんので、今日は触れません。

（3）新発見資料―小城市吉田円明寺の仏像と像内銘文をめぐって

最後に資料３(3)「小城市吉田円明寺の仏像と像内銘文をめぐって」というところで、締めていきたいと思います。これも先ほど、仏像の蔵内文書、あるいは蔵内銘がとても重要な資料だとお話ししました。

実はこの吉田円明寺は、地図でも先ほど説明しましたが、岩蔵寺の末寺で天台宗の寺院です。

ここには従来から、有名な３つの仏像が残されていることが知られていました。ここに出しましたが、中央が地蔵菩薩、左右が弥勒・阿弥陀のセットとなった仏像が伝わっていました。この像内に墨書名が多数書かれていたことはかなり昔からわかっていたのですが、仏像を壊すわけにはいかない。合わせて作られたものなら取り出して読めますが、一木造りだとそれもできません。昔の研究者も苦労して読まれたと思うのですが、なかなか資料的に安定しない、そういう資料だったのです。

それを何とかしようということで、歴博（国立歴史民俗博物館）のプロジェクトで私はヘッドに任命されまして、私と当時歴博にいた、今は九州大学に移られた荒木さん、それから仏像の専門家の神野雄太先生・竹下先生と、４人で取り組みました。仏像にスコープを差し入れ、何とか明かりをとって読んだのです。２０１９年９月８日と書きましたが、今でも覚えているのは台風が来るときで、台風が来たら帰れない、飛行機が飛ばないというときでした。翌日に仕事があって、とにかく読もうということになり、そうしたら台風が逸れて来なかった。何か神風でも吹いたのではないか、という感じで、強く印象に残っています。コロナ禍の前ですね。だいぶ経ちました。

このときに苦労して読み取ったのが、［資料９］のところに記した、像内の文書銘・墨書銘です。これは、神奈川県博の学芸員である神野祐太さんが昨年論文を書かれ、それに依拠いたしました。その前に、銘文としては私の責任で先ほどの図録に公開したのですが、正式な資料集を出そうとして遅くなり、なかなかできずにいました。昨年見直してみたところ、神野さんの読みと違う部分もあるかと思うのですが、それは私の間違いかもしれず、また考えなければならないと思っています。神野さんの仏像の読み取りと性格づけは大変興味深いので、今回それに従ってご紹介しておきたいと思います。像容の点については仏像の先生に一任するしかないと思っております。

３つの仏像のうち、地蔵菩薩像が実は京風の仏像でありまして、その他の阿弥陀と弥勒は地方、九州で作られたものだとわかっています。また本来、この三尊は本来的にはこの組み合わせはありえないということで、像容の違いも含めて、本尊である地蔵菩薩と、阿弥陀・弥勒は別のところにあったのだろうと考えられます。これは近世初頭にすでにそうなっていたことが神野さんの調査でわかりましたので、別のものを後に３つに揃えたというところがあるのかもしれません。だから別に考えないといけないのですが、地蔵菩薩の銘文は大変興味深いものです。

資料３（３）、史料⑥、神野さんによってこれは５つに分けられているわけですが、時間もありませんので、後でご覧いただければと思います。この地蔵菩薩は、元徳年間といいますから鎌倉の最末期ぐらい、１４世紀初頭ですね。北嶺と言われる比叡山周辺で、円派仏師によって作成されたものです。先ほどは慶派でしたが、今度は円派ですね。神野氏の説によると、京の愛宕山、愛宕権現の本地仏である可能性があると言われています。また愛宕権現は地蔵信仰を重視するそうですので、像が地蔵であることと齟齬しないわけです。

銘文を細かく見ますと、北嶺で作って南都に移された。これが銘文の①でわかります。その後はるばる何で移動したのか、船でしょうか。博多と箱崎を経由してこの小城に入ってきたことが、②からわかります。本尊としてこれを円明寺に運んだということですね。その運んだ主は、先ほどから出てくる宗胤を失った妻の明恵（明意）、それから子の胤貞であるということなのです。しかも銘文の読み取りから、これが２人の病気平癒という、健康の成就も含めた銘文であることがわかります。

つまり、仏像を京都であつらえ、それを持ってくるのです。しかも箱崎などの経路がよくわかる。そして、南都や北嶺という京都周辺の宗教勢力の関与がわかる、大変面白い銘文でありまして、ここは動かないだろうと思います。と申しますのは、先ほどの「日蓮遺文紙背文書」の中の１つ「ほうれん書状」を読み解きますと、これは下総の例ですがこんなふうに書いてあるので

す。「ただいま御ほとけは御くだり候」と。千葉氏が千葉で京都の仏を、おそらく京都でよいと思いますが、こうして作らせて下総に持って来させている。そういうことがわかるわけです。

これを参考に考えますと、こうしてあつらえた仏像が、まさに交流の１つとして移動していく。その経緯がわかる。そこが大変面白いというのが１点あるかと思います。またこの銘文の中には、④ですが「大檀那千葉介常胤」とありまして、常胤が山城国愛宕郡の大檀那であると書いてある。このあたりをどう読むかはまだよくわかっておりませんが、千葉常胤にとっての大きな情報が書かれている。常胤の息子の代になりますと、日胤（にちいん）という園城寺僧侶の子どもがいるなど、京都との交流があったのはわかるのですが、常胤自身の足跡も京都に深く刻まれていることが、こうしたところからわかるという、貴重な事実が出てまいりました。今後、いろいろな方々から深く研究されることで、また違うことがわかることを期待したいと思います。

最後になりますが、資料としては最後の［資料 10］、弥勒と阿弥陀です。簡単に致しますが、この２つの仏像は地方で作られたもので、しかも年号が正平２２年、２４年。これは南朝年号ですね。胤泰が当初は南朝に与していたことがわかります。これは他の史料でも明らかですが、南朝に服属した胤泰がその名のもとで作らせたものです。細かいことは申し上げる時間がありませんが、この中には「原有胤」という人、これは先ほどの「岩蔵寺過去帳」に確認できる、千葉から来た原一族の１人で確定できます。またここに「金子殿家行」という記載があり、この金子も岩蔵寺の過去帳には載っていて、これはおそらく肥前の存在であろうと思います。つまりこの２つの地方作の仏像は、大檀那としての胤泰の名のもとに、地域の武士と、連れてきた原という重臣の菩提を弔っているわけですが、そういう形で関与をして作られた、これもやはり千葉家に関連の深い仏像であり、新発見資料であると言えるかと思います。

以上のように、フロンティアを目指す武士たちの動きを見ることができるわけであります。

おわりに

さて、最後になります。武士たちの交流は確かに途絶えるのですが、他のところにも書きましたように、交流自体は続いていくと考えられる事実があると思っています。それは僧侶です。特に日蓮宗の僧は、これ以降、小城へ本格的に進出します。その延長に、室町時代に日親（にっしん）という、日蓮宗の傑僧と言ってよいと思いますが、京都に行き、九州にも下向するなど、自分が動くことで人を結びつける、たいへんな人物です。この人がやはり、１５世紀の半ば以降、この小城に足跡を記すことがわかっています。このことによって、一段と日蓮宗を介した交流が続いていく。このあたり、宗教的な紐帯の強さがひときわ明らかになると思います。

また最近でも、この日親が行ったときに、日親の名前を書いた、本尊を模した中世の笠塔婆が集中して造立されていることが、昨年、立正大学考古学の本間先生によって明らかにされました。これも大変興味深いと思います。こうした交流も含めて、今後もさまざまな検討が必要です。

その後の小城というのは、外山先生のお話にもありましたが、貿易拠点として有名で、『海東諸国紀』という朝鮮側の資料にも出てきます。また隣には日宋貿易の拠点もあったかと思いますので、そういった拠点として重視されていくわけです。さまざまなつながり、信仰や文化、一族の視点、それぞれを考えながら、今後も千葉と小城との交流は研究していく価値が大いにあると考える次第であります。

このように「交流は終わらない」、ということをもって、本日の講演を終わりにさせていただきたいと思います。どうもご清聴ありがとうございました。

司会　以上で湯浅先生の講演を終了させていただきます。先生、ありがとうございました。このあと、休憩後に会場でいただいた先生へのご質問にご回答いただく時間を設けております。

司会　講座を再開いたします。会場の皆様からいただいたご質問に、湯浅先生よりご回答いただきます。お時間の都合もあり、すべてのご質問にはお答えしきれないかもしれませんが、どうぞご了承ください。よろしくお願いいたします。

湯浅　はい、それでは再開させていただきます。たくさんのご質問をちょうだいし、講師冥利に尽きるというものです。大変ありがたく思っておりますが、お答えが難しいものもございますので、適宜お答えさせていただきます。

まず妙見様との関わりについて、２件ほど頂戴しました。妙見様は法華経寺の中にも社がございます。千葉胤継の寄進状という中世の文書にも出てくるかと思います。そのもとはやはり千葉神社の妙見でありまして、本来の信仰的な性格は子細まではよくわからないのですが、利根川を中心とした船の流域の信仰心であるとか、あるいは軍神であるとか、その融合であるとか、いろいろなことが考えられます。千葉氏が一族を結束するために妙見信仰を取り込み、また絵巻物などもつくっていく。そうしたことがわかっているかと思いますので、そのようにご理解いただければと思います。

次に「開府９００年をどのように解明したのか」、また「千葉氏の交流、千葉氏にご縁のある地域・人々の交流について全体的に教えてほしい」というご質問をいただきました。これはなかなか歴史研究的にはわからないことが多く、郷土博物館の方でより詳しく知ることができると思いますし、千葉氏サミットというものもあるそうですので、そちらで研究していただければと思います。申し訳ありません。

肥前千葉氏に関わるご質問の中に、「この氏族はどうなのか」といったことも含め、土着した

後の展開を知りたいというお声が多くありました。これは当然かと思います。私の話では、そのあとどのように華々しく活躍したのかにはほとんど触れておりませんでした。なかなか難しい部分もありましてお答えできる部分とできない部分がいろいろあるので、かいつまんでお話ししたいと思います。

まず、土着のインセンティブ、動機のことですが、これは先ほどお話ししたように、やはり親族間の隔たりということが、今回、個別的には大きい胤継と胤泰のドラマだと私は思ったのです。それと同時に、この時代は、従来からの交流の基盤となるような、全国の所領をまたにかけて経済的な富を蓄積する、そういうこと自体が変わってくると言われています。これはいろいろな検討をしなければならない、学術的に最先端の話で、私もまだよくわからないところがあります。

大きな分かれ目であるということ、これは重要で、その中には１つ１つの武士団にドラマがあると思うのです。このドラマを追いかけるのは大変面白い研究で、私も京極や毛利、そうした人々を中心に検討しておりますが、もう少し他の事例も含めて検討してみたいと思います。そういう意味でサンプルになるのは、いま申し上げた京極や毛利、三浦、それから北条氏が全国的に大きな所領を持っていますので、それを１つのモデルとして考えていく。全体的な所領の経営している他の氏族についてご質問がありましたが、そういうことを進めていければと思います。

それから、「九州に下向した他の武士はどのような者がいるのか」というご質問を受けました。これは結構おります。関東の武士では。宇都宮もそうですし、平氏の一族である渋谷もそうです。あるいは、小代という武士が、武蔵武士におりました。これは肥後ですね。それから、日向に伊東というのがあります。また、島津という武士団も、頼朝の時代から鎮西に下りますが、もともとは惟宗姓を持つ京都の貴族だと推定されていますので、その時代からかなり大きく動いていたと言えるかもしれません。このあたりでご勘弁いただければと思います。

次にこれは１番考え込んでしまったものの１つですが、「いつごろまで全国に散らばった所領に千葉は関与していたか、肥前だけでなくて」というご質問を受けました。これもなかなか難しい。千葉氏の具体的な関与、房総の一族が関与することは、今日の話あたりで大体途切れるだろうと思います。ただ、千葉氏のアイデンティティや、「自分は千葉氏の一族だ」と言ってそこで土着していく武士、たとえば東氏、遠藤氏が美濃国にいて、今度の博物館の企画展でも取り上げてくださるそうですが、そういう氏族もいるわけです。ですから、それぞれの領域で、千葉氏の一族であることを主張していく、ということだと思うのです。

一方もう１つ考え込んだのは、「千葉を名乗っていくのか」ということです。確かに、この方がおっしゃるように、東北では千葉さんが多い。平泉あたりに行くと千葉さんが多いので、東北に所領を多く持っていた痕跡は、千葉氏の一族も含めてあったと思いますし、移住した一族が土着することは当然あったと思います。肥前も含めて「千葉」と名乗っていく、そこが、私の知る範囲では、あまり中世では確認できない。むしろ近世以降になると、自分の由緒を再発見して、先ほどの交流の話もそうですが、千葉の名を発見し、自分が一族であると確認していく動きはあったかと思います。しかし中世で千葉を頑なに名乗るかどうかは、記憶にありません。いろいろな先生方に聞いてみたいくらいですが、あまりないのかなと思います。その中では、肥前は明確に千葉を名乗っていく。それくらいしか申し上げられずこれは難問だと思いました。

ほかにたとえば「仁戸名という武士は仁戸名町と関係がありますか」というご質問は、「あります」と先ほど申し上げたつもりです。千葉からは少ないですよね。やはり千田庄周辺から移っていく、そのことの意味は、肥前千葉氏の移住の個性だと思うのです。千葉の方からはあまり行かない。あるいは八幡庄なども可能性も含めて２つの氏ということなので、やはりごっそり千田庄のあたりへ人が行く。その人たちの名前で、たとえば円城寺さん、三谷さん、原さんなどがいるわけですが、向こうでそれが続いていくのかどうかも実は研究課題でした。現地のお墓に入っ

てお墓の銘を読み取ろうかという話もあったのですが、あまりに膨大で断念した記憶があります。そこは地元の研究の中で、近世以降も含めていろいろな研究の中で明らかになってくると一番良いと思っておりまして、私の能力の及ばないところです。申し訳ありません。

おおかた分けてお話ししたつもりですが、たとえば今の仁戸名さんのことで言えば、「鑰山（鍵尼）氏という武士が肥前にいるのですが、これは千葉氏が肥前に連れてきたのかどうか」とお尋ねになった方がいらっしゃいます。私は、関東の方ではあまり確認できなかったように思います。むしろ肥前、九州の地名かなと思っていました。こちら間違っていたらご教示いただければと思います。

次に「幕末の江藤新平は佐賀の千葉氏と関係がありますか」というのは、私の方が教えていただきたいところです。幕末まで行きますと許容範囲を超えてしまいます。申し訳ございません。同じく「鍋島藩が出島を管理している」という興味深いお話を教えてくださった方もおりますが、これも私の手に負えるところではございません。九州の武士たちは、個別に、中世においても、自分で朝鮮や中国に使いを送って貿易をする場合があります。大内や島津、それから千葉もそうであったと思います。海浜に住む中世領主は、九州でかなりそうした交易を行っていたということは、申し上げておきたいと思います。出島の話は、それと直接関わるかどうかわからないので、ご勘弁いただきたいと思います。

すべてとはいきませんでしたが、皆さんのご関心は、やはり氏族の在り方やルーツの探し方を千葉と絡めて知りたい、ということが多かったと思います。それは私も含めて歴史研究の大きな課題だと思います。ただそれはなかなか難しいところで、いろいろな方法でこれから追っていかなければならない課題だと思っております。今後もお時間をいただき、ご期待いただければと思います。少し進めていきたいというところもございます。以上ですが、よろしいでしょうか。いろいろとご質問ありがとうございました。本日はご清聴いただき、ありがとうございました。

司会　以上で湯浅先生の講演を終了させていただきます。本日はありがとうございました。

千葉市は、千葉開府 900 年を迎え、千葉氏の顕彰を図るべく、様々な取り組みを行っております。郷土博物館では、１１月に歴史講座、１２月に千葉大学と共催の講座を計画しております。

また来月、７月１８日（土）より、郷土博物館の１階で特別展が始まります。「千葉氏リターンズ―千葉に集う一族の９００年―」というテーマで、千葉氏サミットに参加している自治体など全国からさまざまな資料をお借りして展示いたします。ただいま準備を進めておりますので、今後ポスターや市政だより等をご覧いただければ幸いです。ぜひ皆様のお越しをお待ちしております。本日はご参加いただき、誠にありがとうございました。